

# パネル・ディスカッション

司会 獨協大学教授 板場 良久

フォーラムの総括として最後にパネル・ディスカッションが開かれた。今回のフォーラムで講演して頂いた三名の先生方に加えて、獨協大学からコーディネーター三名の合計六名がパネル・ディスカッションに参加した。

三名の講演に対する応答として、講演の内容要約と共に、各コーディネーターから講演者への質問をし、それに講演者が応えるという形式で行われた。最初に柿田から、モクシー教授の基調講演の解釈が提示され、視覚と他の諸感覚との関連についての問いと、講演タイトルにも含まれている唯物性とは何かという問いの二つがたてられた。最初の問いにモクシー教授は感覚が不可分であることを指摘した。

二つ目の唯物性の問いには、三名の講演者全てが応答した。モクシー教授は絵画を始めたとする視覚イメージは言葉を超えており、その物質性は我々の感覚に強力な効果を引き起こす

を分別することで、〈見える〉という経験的事実を問い直す可能性をいかに広げたかが、素描を含む彼の作品の中に映り込む物質世界の描き方に見出すことができる点を指摘されていた。同時に、今回の発表の中で風景に言及されることがなかったことや、デューラー自身が芸術活動の為にアトリエの外に出て行った可能性を問われていた。ポネ教授からの青山准教授への応答として、風景と時間の関係や旅行中のスケッチの可能性等に言及され、最も重要な点は、デューラーが紙の上に、どのように自然を表現するかという手法を発明したことであると強調されていた。すなわち、デューラーは、自然そのものを発明したわけではない

ということである。実際、彼が何を見たのかは我々にはわからないのだが、しかし、彼が残したイメージは、彼自身の書いた痕跡として、その表現の中に彼自身が書き込まれているのである。

そして、福田専任講師からはアレナレス准教授の特別講演へのコメントと問いが投げかけられた。講演で主題と

はずであると発言された。しかし、同時にこのような唯物性は、我々が把握することから常に逃れる厄介さを含むのであり、その現実的な姿を全体像として確実に知ることができないのであると

仰っていた。ポネ教授も、モクシー教授の発言に同意し、その上で過去の歴史は未来の予測の為にありというよりも、ここに生きている我々について多くの示唆を与えてくれることを付言した。当然、デューラーは二十一世紀には生きていない訳だが、今の我々の生息に關する唯物性や現実性についてもわかりえたはずであると。なぜなら、彼を始めとする当時の芸術家達は、現実性や唯物性を構成する概念について、我々よりもよく分かっていたように思えるのだと。更に、アレナレス准教授は唯物性の鑑賞者を介して移動する可能性について言及し、その移動が新たなモノの見方を生み出すことを発言された。

続いて、青山准教授からポネ教授の特別講演の内容の要約と質問がなされた。講演内容の主旨として、デューラーが用いた素描というテクニクがどれほど視覚の可能性を拡充することに成功したかという点。そして素材を木版画と銅版画

なったガストン・ミジョンの斬新さが、十九世紀当時流行していたジャポニズムとは異なる固有なものであった点。そして、ミジョンが美術館を訪れて東洋の仏教美術作品を眺める西洋の鑑賞者



柿田 秀樹 (獨協大学教授)

たちに、西洋美術と東洋の仏教美術を並べて配置することで、新たなものの見方を提示した点を指摘した。ミジョンは工芸品に非常に詳しい家系の人でもあり、フランス革命とともになおざりにされていた宗教美術と工芸品の再評価のきっかけとして、極東美術を用いたという新しさも持ち合わせていたことにも言及した。同時にこのミジョンの目的と試みがどれほど人々に浸透したのかについて質問が投げかけられた。アレナレス准教授からは、ミジョンが仏教美術の受容の第一人者であり、美術作品の真の意味を解釈しようとした彼の姿勢に、我々は大いに学ぶところがあるとの応答があった。

その後、唯物性Ⅱ物質の概念を中心とした議論が参加者の間で続いた。物質の文化間移動の問題、唯物性の概念化にまつわる問題点や最近の研究での注目度などが論じられた。最後に、今と歴史の結びつきで重要な示唆がポネ教授からあった。それは、我々が過去から学ぶことは確かではあるが、その



板場 良久 (獨協大学教授)



学びは過去を反復するのではなく、新しい概念として、自分の時代の自分のための作品を今ここで新たに創出することであるという点に尽きる。デューラーが生きていた当時彼は芸術家になりたかったけれど、芸術家という範疇そのものが存在しなかった。そこで、彼は自らを芸術家として発明したのだと。彼は新しい概念の発明家でもあり、キリスト教徒としての人間性 $\parallel$ ヒューマニティを作った。それは懐古的なアンティークによって過去の復権を図るのではなく、自分の生きる現実を自ら発明したのであった。

この指摘は、まさに二十一世紀の混沌に生き、人文学の重要性が何処にあるのかを真摯に考える我々に大きな示唆を与えてくれる言葉である。人文学の価値がその創造性にある。こと。それは、既にそこにある客観的な世界を発見(discover)するのでも、何かを自由気ままに創作するのでもなく、真の意味で発明(invent)するということに価値がある。過去という素材から取捨選択することで、発明という新たな創造性が獲得できる。ここでは文字や視覚イメージや、歴史や文化が不可避に関連する中で物事の可能性を考え抜いていく姿勢が問われるのである。

